

今年度の活動

2023 年 1 月から 12 月の研究活動を報告する。20 世紀後半を対象に、「マス・メディアのなかの芸術家像」という主題でこれまで研究を重ねてきた。この研究において磯崎新、坂本龍一という、世代の異なる 2 人の芸術家の活動は、定点観測的な分析対象であった。基本的には、メディアの中での活動を分析するアプローチをとってきたので、資料収集を元に言説分析を中心に、時にインタビューを重ねてきた。その磯崎は、2022 年 12 月末に逝去し、坂本は 2023 年 3 月末に逝去した。こうした事情が一因となり、2023 年は、近年掲げてきた「マス・メディアのなかの芸術家像」という主題の振り返りと、新たな研究方向へと踏み出す機会となった。

磯崎に関しては、昨年度から取り組んでいる 1978 年にパリ・フェスティバル・ドートンヌで開催された間展の研究に関する、思想的背景を探る研究として、2022 年にテヘラン大学での口頭発表を基にしたテキスト、「磯崎新のメビウスの輪 — 「間」の空間」から《砂漠の寝所》まで》(フィルムアート社 web『かみのたね』2023 年 1 月 17 日)を公開。7 月には、表象文化論学会の基調講演に招待され、「間展の「間」と磯崎新の「間」(第 17 回大会 シンポジウム:「間」のポエティクスをめぐって 2023 年 7 月 9 日)として、残されたカタログや資料写真、図面を基にした展覧会研究を発表した。

コロナ禍以前から準備が進んでいた、POWER STATION OF ART(上海)での展覧会がオープンし、*From "Electric Labyrinth" to "Obscured Horizon"* というテーマで講演をした(2023 年 10 月 29 日)。

また、2021 年度に請けた研究助成の「WRI session 研究報告会 2023」(2023 年 4 月 15 日)で「パレオ TV と建築——メディア・イベントの設計者としての磯崎新」を講演した。以上、これまで取り組んできた研究に基づく発表である。

新たにジェンダー論を導入した磯崎の活動を分析する試みとして、「境界線を引く場所——磯崎新のパートナーシップ」(『現代思想』2023 年 3 月)と「妹島和世を語る磯崎新——『日本建築思想史』を読む」(『思想』2024 年 1 月)を論文で発表した。この論点は、今後も継続することになるだろう。坂本に関しては、2019 年度に国際日本文化研究センター(日文研)で実施した共同研究「マス・メディアの中の芸術家像」を契機に、資料研究をすすめてきた。また『美術手帖』『芸術新潮』等への寄稿を元に、『坂本龍一のメディア・パフォーマンス マス・メディアの中の芸術家像』(川崎弘二:共著、フィルムアート社)を 9 月に刊行した。本書の準備と合わせて、附属図書館にて「TOKYO MELODY 1984 坂本龍一図書資料展」(5~7 月)を開催した。

今年度から、科研費「音響技師 菊池信之の映画音響表現技法研究」(基盤研究 C)の共同研究者として、定期的に長瀧寛幸(東京藝術大学)と研究のミーティ

ングを持っている。2012 年頃から断続的に長篇と続けてきた研究。今年度は菊地へのオーラルヒストリーを実施する準備として、資料研究を中心に活動した。

詩人として、日々「純粹詩」の「量子詩」の制作を継続。多和田葉子と Marion Poschmann による詩のアンソロジー、*Eine raffinierte Grenze aus Licht: Japanische Dichtung der Gegenwart*, Wallstein Verlag GmbH に、「量子詩」と「時の声」が多和田によるドイツ語訳で収録。2022 年度に web 連載した作品を詩集『Cycle 自転車をめぐる散文詩の試み』(enginebooks)にまとめた。この詩集をもとに、3 月に秋田公立美術大学、7、8 月に富山大学芸術文化学部でワークショップを実施した。

学内では、新たに Art of listening プロジェクトで活動した。授業の研究教育活動、担当学生の指導の他、附属図書館長、研究委員会(委員長)等を務めた。

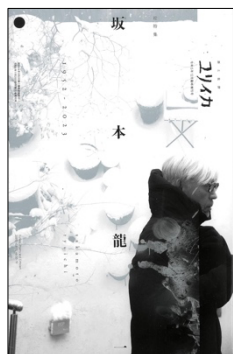
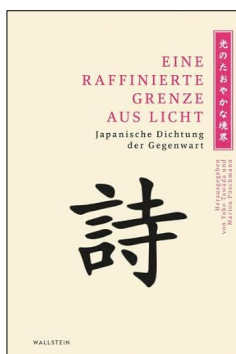
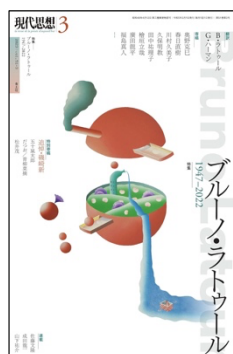
[PJ]The Art of Listening

[授業]総合学 A、総合学 C、メディア表現特論 C、メディア表現基礎 2

松井茂の詩集『cycle 自転車をめぐる散文詩の試み』は、自転車というモチーフを中心とした散文詩の集積です。自転車に乗ることによって、身体を動かす、風景を眺め、季節を感じるができるという魅力が採られた詩が収められています。また、自転車に乗ることによって感じる自由や解放感、あるいは異変や切なさなど、人間の感情や思考にも表現を当てています。

松井茂の文章は、独自のリズム感と音韻を持ち、読み手を心地よい音楽のような世界に誘います。また、風景や自然の描写が詳細かつ美しく、読者をそこに引き込んでくれます。

『cycle 自転車をめぐる散文詩の試み』は、自転車に乗ることの魅力や、自然との共生を感じることの大切さなど、深い哲学的なテーマにも触れています。自転車が持つ多様な意味を、繊細で美しい言葉で表現している詩集です。



[上記以外の寄稿等]

・[対談]松井茂×菊地成孔 坂本龍一という潮 ニ〇世紀カルチャーを捉え返す『週刊読書人』(3517) 2023 年 12 月

・「美貌の青空はどこに——「一音一時」展をめぐるメモランダム」『ユリイカ』55(16) 2023 年 11 月

- ・「弾はまだ残ってるがよ——戦後日本美術の仁義を問う」(書評:成相肇『芸術のわるさ』)『週刊読書人』(3503)2023年8月
- ・「配信者という芸術家像のはじまり」『芸術新潮』74(5)2023年5月
- ・「坂本龍一、李禹煥に出会う——解体から沈黙へ」『美術手帖 web』2023年4月
- ・「日記という表現形式——音楽のエラボレーション」『美術手帖 web』2023年4月
- ・「対極から論じられた虚像論——更新された高松次郎の作品世界」(書評:大澤慶久『高松次郎 リアリティ;アクチュアリティの美学』)『週刊読書人』(3483)2023年3月
- ・[対談]日埜直彦×松井茂「追悼=磯崎新「事件」の仕掛け人」『週刊読書人』(3479)2023年3月
- ・「都市文化と戦後の終わり 新たな文化の始まりはどこに?」(書評:堀越謙三、高崎俊夫『インディペンデントの栄光 ユーロスペースから世界へ』)『映像メディア学 東京藝術大学大学院映像研究科紀要』13、2023年3月
- ・「コロナ禍のもとで、蜃気楼を待ちながら」山下麻衣+小林直人 もし太陽に名前がなかったら(展覧会カタログ)22-32 2023年1月
- ・「同じ距離に置くコト。すぐそばにあるモノ。それを待つヒト(々)。(展評「野口里佳 不思議な力」展)」『美術手帖 web』2023年1月
- ・[対談]松井茂×牧信太郎『美術手帖』坂本龍一特集、6年後の編集後記——『async』と『12』から「坂本龍一」を考える』『美術手帖 web』2023年1月